

担当：清水泰洋 (simizu@kobe-u.ac.jp)

I. 講義のテーマと目標

この講義では、企業が公表する財務諸表の内容とその分析方法を解説します。財務会計に関する事前の知識を前提とはしていませんが、最低限のビジネスに関する知識については要求されます。

会計は企業の言語だといわれています。これには 2 つの意味があり、第 1 が、いかなる企業であっても、会計なしに経営を行うことは不可能であるということです。会計情報は、企業の現状を要約するダッシュボードであり、その正しい読み取り方は経営に携わるものには必須の知識です。第 2 が、企業外部者が企業や経営を理解するためのツールとして会計情報が有用である、ということです。企業には様々な利害関係者がいますが、会計情報は利害関係者に伝達されます。利害関係者は、会計情報を重要な情報源として企業に対する意思決定を行います。

この 2 つの意味は、誰が、どのような目的で会計情報を利用するかという問題であり、この問題は会計の区分と密接に関連しています。第 1 の意味に関わる会計、すなわち企業経営に資する会計を管理会計、後者のための会計、すなわち企業外部者に情報を提供するための会計を財務会計といいます。実際には 2 つの会計は密接に関連しています。たとえば、財務会計向けの情報が企業経営に用いられることは日常的な現象です。これら 2 種類の会計は、伝統的に大学の授業では異なる授業科目で説明が行われます。この講義はタイトルの通り、財務会計に関する講義です。

財務会計の講義には、財務諸表を作成する方法に主眼を置くものと、作成された財務諸表を利用することに主眼を置くものがあります。この講義では、後者、すなわち作成され公表された財務諸表を分析することにより重きを置きます。そのため、「仕訳」、「借方」、「貸方」など、簿記に独特の用語はほとんど出てきませんが、初歩的な簿記の知識は授業の理解の役に立つでしょう。簿記の知識とは、企業人のコンテキストで理解すると、ある行為が財務諸表にいかなる影響を与えるかを正しく理解できることに他なりません。授業では、複式簿記特有の知識に強く依存しない形で、経済事象の財務諸表への影響を説明します。

本講義の主たる受講者として以下の 2 つのクラスの人を想定しています。第 1 が会計についての理解が十分ではないと感じられている方、第 2 が会計の知識は十分あると認識しているが、知識をリフレッシュしたいと感じられている方（そして周囲の皆さんの学習を助ける意欲を持っておられる方）です。

この講義においては、近年特に採用企業数が増加している国際会計基準 (IAS/IFRS) について、ケース等を用いて説明しますが、主たる課題とはしません。ただし、この授業で学ぶ財務諸表の見方や財務分析の方法は、日本の財務諸表に限られない、普遍的なものです。ま

た、授業時間の制約上、企業評価について取り上げることはできません（企業評価は、ファイナンス応用研究などの関連授業科目の主要トピックの一つです）。財務分析の手法は、その後の経営戦略の評価や企業評価の基礎となるので、その考え方をマスターしましょう。

II. 教科書・参考書

テキストとして、桜井久勝著『財務諸表分析（第 6 版）』中央経済社、2015 年、ISBN-13: 9784502140013 を用います。これに加え、資料を配付していきます。資料の配付につきましては、今年度より神戸大学の学修管理システム（Learning Management System: LMS）の BEEF を利用します。

また、特に会計について全く知識を有さない方には事前の一冊でも財務会計に関する本を読んでおくことをお勧めします。その中でも、桜井久勝・須田一幸著『財務会計・入門：企業活動を描き出す会計情報とその活用法〔第 10 版補訂〕』有斐閣（有斐閣アルマ）、2016 年、ISBN-13: 9784641220737, をお勧めしておきます。同書が難しい場合、その前の会計の説明として同じく有斐閣アルマから、川本淳、野口昌良、勝尾裕子、山田純平、荒田映子著『はじめて出会う会計学〔新版〕』（2015 年、ISBN-13: 9784641123731）という本が出ていますのでこちらを先に目を通しておくと良いでしょう。

III. 担当者

清水泰洋（しみずやすひろ）

主な研究領域は会計史で、19 世紀後半からのアメリカの会計について研究を行うとともに、明治期以降の日本企業の会計実務にも関心を有しております。講義自体は現在に焦点を当てますが、現行のルールや実務を歴史的文脈に置いて説明することが多くなるかと思えます。

連絡先（メールアドレス）は冒頭にも記してありますが、メールアドレスの「@」の前に注意してください（“h” がありません）。

IV. 授業計画

授業の構成の概要

時間割の構成上、1 時限目・2 時限目の 2 コマ授業の週と、3～5 時限目の 3 コマ授業の週から構成されています。原則各コマに 1 つのトピックを割り当てていく予定です。各コマに該当するテキストの章を示していますので、授業の前にテキストの該当箇所目を通しておいてください。

知識を獲得するための授業ですので、授業の主要な部分は講義形式での説明となります。ただし、説明に際しては実際の作業を伴う場面があります。特に財務諸表分析においては、計算を行います。電卓を用いて手計算するか、あるいはアップロードした Excel の財務データをもとに比率計算をしていただくこととなります。初回のセッションでも計算（足し算・

引き算) は行いますので、計算が得意でない方は、電卓を持参して下さい。

基本的に毎週、事後課題を課します。その回の授業の内容について確認するもの、あるいは授業内容を基礎として考察をしていただくものなど内容は回ごとに異なります。次週の開始時に答え合わせと問題の内容に関する議論を行えればと考えております。

第 1 週 (5 月 21 日 1・2 限, #1・2) 財務諸表の入手

これから 1 月半にわたって財務会計を学習していきます。第 1 週は財務会計のアウトプットである財務諸表についての概略を説明します。まずは、現物の財務諸表を目にすること、そして実際に入手することから始めていきましょう。

事前の準備として、テキストの第 1 章・第 2 章に目を通しておいて下さい。

また、2 コマ目の補助教材として「会計記録の基礎」という文書を配布します(ダウンロード可能です。また、印刷版については当日に配布予定)。こちらは、財務会計の基礎となる複式簿記について、その原理部分を解説したものです。複式簿記に触れられたことのない人、あるいは仕訳はできてもそれが何を意味しているのかを十分に理解できていない人は目を通してください。

(1) イントロダクション・財務諸表の入手 (テキスト第 1 章・第 2 章)

第 1 週の授業では、財務会計に関する大まかなイメージをつかみ、公開会社の財務諸表を実際に入手し、そこから何がわかるかについて概観します。

講義では、会計、特に財務会計とは何かということの説明から始めます。財務会計のゴールである主要な財務諸表の名称と、それぞれの示すものの概要をつかんだ後、これらの財務諸表の入手方法について説明します。

(2) 会計記録の基礎 (テキスト該当章なし)

第 1 週 2 コマ目は、経済事象が財務諸表にいかに関与を与えるかについて概説します。次週以降により詳細な財務諸表の説明を行います。ここで説明する事項は、今後の会計的発想の基礎となるものです。必ず理解する必要があります。簿記に関して初歩的な知識を持っている人であっても、財務諸表への影響を考えずに仕訳のみを行ってきた人は、理解するようにしてください。逆に、ある取引が財務諸表にいかなる影響を与えるのかについて正確な理解ができている人はこのコマについては出席する必要はありません。

第 2 週 (5 月 28 日, #3, 4, 5) 財務諸表の見方 (1)

第 2 週の 1 日で、より詳しく財務諸表の見方を学んでいきます。主要な財務諸表 3 種、つまり貸借対照表、損益計算書、そしてキャッシュ・フロー計算書をの構造とその主要な構成要素を説明します。また、下記のセッション内容に加えて、第 1 週で説明した、経済事象の記録について、確認を行います。

事前の準備として、テキストの第 3 章から第 5 章に目を通しておいてください。テキスト中で赤色の太字で記載された項目は、重要な概念や項目ですが、現時点ですべてを記憶しておく必要はありません。まずは概要を理解することに努め、財務諸表中の項目の内容がわからなくなったとき、テキストに戻り、辞書的に使用してください。

(3) 貸借対照表の見方 (テキスト第 3 章)

第 2 週の 1 コマ目は貸借対照表の見方を説明します。第 1 週では簡単な説明にとどめた資産、負債、資本という 3 つの項目について、より詳しい説明を行います。ここですべての項目を記憶する必要はありませんが、貸借対照表を「ブロック」ごとに見ること、また個々の項目を見ることの両者が必要であることを認識します。

(4) 損益計算書の見方 (テキスト第 4 章)

2 コマ目は損益計算書の見方について説明します。単純に「利益」といっても、売上総利益、営業利益、経常利益、当期純利益、そして包括利益と、「利益」が数多く出てきます。なぜこのように沢山の利益が存在するのでしょうか。そもそも利益とは何でしょうか。損益計算書を見る上でのポイントを概説します。

(5) キャッシュ・フロー計算書の見方 (テキスト第 5 章)

3 コマ目はキャッシュ・フロー計算書の見方を説明します。「黒字倒産」という言葉を聞いたことのある人は少なくないと思います。利益とは企業活動の結果としての(株主)資本の増加ということを説明しました。利益はとても重要な指標ですが、利益がすべてではありません。会計の世界では利益は「意見」であり、そこには「品質」があると言われています。利益の品質の 1 つの重要な指標が、利益に現金収入が伴っているかというものです。ここではキャッシュ情報の重要性、キャッシュ・フロー計算書の中の区分、営業キャッシュ・フローの 2 つの計算方法、そしてフリー・キャッシュ・フローについて概説します。

第 3 週 (6 月 4 日, #6, 7) 財務諸表分析の前に

この週で、本格的な財務諸表分析を行う前の基礎作業が完成します。まず、前週に説明した財務諸表本体の周辺にある情報の見方を説明します。新聞の見出しを飾ることは少ない情報ですが、本格的な分析には不可欠の情報です。また、下記のセッション内容に加えて、第 1 週で説明した、経済事象の記録について、確認を行います。

事前の準備として、テキストの第 6 章及び第 7 章に目を通しておいてください。

(6) 会計方針・附属明細表の見方 (テキスト第 6 章)

財務諸表は様々な仮定に基づいて作成されています。現在の会計においては、個々の企業が行う仮定については性善説がとられています。しかし、外部者がその仮定の是非を判断で

きるようにするため、当該仮定について説明を行うことが求められています。これが会計方針です。会計方針の変更は、利益の計算に影響を与えます。財務分析を行う際、どのような点に注意すれば良いのでしょうか。

財務諸表は膨大な取引の要約です。個々の取引は圧縮された形で少数の結果の数値へと要約されます。企業全体を評価するとき、このような要約のプロセスは必須ですが、時には詳細な情報が知りたい時もあります。この役割を果たすのが附属明細表です。

このセッションでは、財務諸表の本体ではありませんが、同様に重要な情報を提供する様々な附属表、そして複数事業部を持つ企業の分析において極めて重要となるセグメント情報について概説します。

(7) 分析の視点と方法 (テキスト第 7 章)

財務諸表分析は、分析対象企業について何らかの結論を出すために行う作業です。そのため、質問が異なれば何を分析するか、分析の内容が異なってきます。また、異なる会社の分析結果を比較する場合、先に習った会計方針の相違が影響をもたらす場合もあります。分析に先立ち、注意すべきことを学んでいきます。

第 4 週 (6 月 11 日, #8, 9) 財務諸表分析 (1)

いよいよ財務諸表分析を行います。テキストの順にしたがい収益性の分析を行います。収益性の分析は、近年特に名前が知られるようになった ROE 等の資本利益率の計算から始まります。しかし、収益性の分析の内容は非常に多岐にわたっているため、この週では 2 コマを使って収益性の分析を説明し、計算問題を含む実際の企業の財務諸表分析を行う時間をとります。

事前の準備として、テキストの第 8 章に目を通しておいてください。

(8)(9) 収益性の分析 (テキスト第 8 章)

財務諸表分析の第一は収益性の分析です。営利企業の目的として利益の獲得があげられるならば、いかに効率的にこの目標を達成したかを示す収益性の指標は財務分析の中でもきわめて重要な部分を占めています。この回では収益性についての代表的な指標として資本利益率を紹介し、それを分解し、さらにその構成要素についてどのような分析が可能かについて概説します。

第 5 週 (6 月 18 日, #10, 11) 財務諸表分析 (2)

引き続き財務諸表の分析を行います。第 5 週で取り扱うのは生産性の分析と不確実性によるリスクの分析です。

事前の準備として、テキストの第 9 章および第 10 章に目を通しておいてください。

(10) 生産性の分析 (テキスト第 9 章)

企業の営利的側面は収益性によって評価されますが、企業を社会的な文脈に位置づけると生産性という側面が重要になってきます。そこで生産性について解説を行います。2000 年以降連結財務情報が主たる情報となつてから、生産性の分析は難しくなる一方で、国際会計基準 (IFRS) を採用する企業の生産性の分析が可能となりつつあります。可能な範囲で生産性の分析を試みたいと思います。

(11) 安全性の分析 (テキスト第 10 章)

続いての分析が安全性の分析です。昨年、過去最高益を公表した企業が 1 年以内に倒産するという事例がいくつか生じました。収益性の面では問題がなさそうな企業でも倒産するとはどういうことでしょうか。後半では安全性という面から企業を分析する方法を説明します。

第 6 週 (6 月 25 日, #12, 13) 財務諸表分析 (3)

この週は卓越論文候補中間公開発表会が開催されるため、1 コマのみの授業です。第 4 週の終わりに公表するグループ発表課題について、その結論をチームごとに公表していただきます。フォーマットは課題発表時に示しますが、1 チーム当たり 10 分程度の報告ができるよう準備をしてください。

また、この週は講義の時間は短めにし、次週のグループ発表のための準備の時間を多めにとります。

(12) 不確実性によるリスクの分析 (テキスト第 11 章)

不確実性は企業の業績にいかなる影響を与えるのでしょうか。例えば、売上高の小さな変化に対して利益額が大きく変動することがよく見られますが、それはなぜでしょうか。リスクを売上高、費用構造、レバレッジの側面から理解します。

(13) 成長性の分析 (テキスト第 12 章)

5 つの側面から行う分析の最後が成長性の分析です。企業にとって、成長とはたとえば売上高、利益、資産が大きくなることと単純に理解することができるかもしれませんが、会社を取り巻くステークホルダー、特に株主にとっての成長は単純なものではありません。重要なのは 1 株当たりの数字、特に 1 株当たりの利益の数字であり、これが将来成長するか否かが株主にとっての企業の成長を意味します。このコマでは 1 株当たり情報の重要性を説明した後、1 株当たり利益情報に関連する重要な指標としてのサステナブル成長率や、1 株当たり利益情報を用いる場合の注意点などについて説明します。

第 7 週 (7 月 2 日, #14, 15) ケース発表

最後の週は総まとめとして、財務諸表分析を主たるツールとした企業分析の発表会を行います。課題は、以下の通りです。各チームが分析の結果を持ち寄り、議論を通じて企業分析における財務諸表分析の役割について再確認したいと考えています。

<グループ発表>同業種に属する会社 2 社 (以上) を選び、当該会社について比較財務分析を行って下さい。長期での分析には、授業では詳しく触れなかった財務諸表の組み替えが必要となりますので、目安となる期間は 5 年の中期とします。この期間にそれぞれの会社に起こったことなどの背景となる事実と財務指標との関係を考察してください。

V. 評価について

授業への出席および貢献 (20%),

課題 (50%),

グループでの分析事例の評価 (30%),

の 3 つにより評価を行います。グループ評価点はグループに対するピア・レビューの得点と、グループ内でのメンバーのピア・レビューの得点の両者にに基づき計算を行います。小テストの評点は、課題の評価に含めます (全体の 15%となるように調整を行います)。

VI. その他

無駄なものはなくすように試みておりますが、例年配付資料が多めです。ご了解ください。また、授業資料については、前日までに神戸大学学修管理システム BEEF にアップロードします。

BEEF: beef.center.kobe-u.ac.jp